

産後早期の母親としての自信と母乳育児との関連

上原 諒子 中西 伸子  
奈良県立医科大学大学院看護学研究科

The relationship between self-confidence as mothers and breastfeeding

Ryoko Uehara Nobuko Nakanishi  
Graduate School of Nursing , Nara Medical University

本研究の目的は、産後早期の母親としての自信と母乳育児との関連について明らかにすることである。1ヶ月健診に訪れた母親に母親としての自信や母乳育児について質問紙調査を実施した。母親としての自信と母乳育児との関連について初産婦と経産婦でみた結果、初産婦の1ヶ月後の母親としての自信に有意な関連があったのは、退院時の「うまく授乳できないときの対応」、「授乳時の抱き方・吸わせ方」への自信や、「母乳が足りているかどうか」、「ミルクの量がわからない」という不安や「スタッフによって情報が異なる」ことであった。また、退院時・1ヶ月後において母親としての自信を持っていた母親は、初産婦より経産婦のほうが有意に多いことが明らかになった。

The purpose of the present study is to elucidate the relationship between self-confidence as mothers early postpartum and breastfeeding. Postpartum 1-month-old mothers completed a questionnaire survey with regards to their self-confidence as mothers and breastfeeding. We examined the relationship between self-confidence as mothers and breastfeeding in primipara and multipara women. Results demonstrated significant correlations in primipara women between self-confidence as mothers at 1 month postpartum with breastfeeding method at discharge, anxiety about the amount of breastfeeding and discrepancies in information provided by staff. We also found that self-confidence as mothers early postpartum was significantly greater in multipara women at discharge and at 1 month.

キーワード：産後早期、母親としての自信、母乳育児

Keywords : early postpartum ,self-confidence as mothers ,breastfeeding

### I. 緒言

近年、産後の母親の不安や抑うつは母子関係や子どもの成長発達に悪影響を与えることが明らかにされている(佐藤ら,2003)。育児不安が強い母親や抑うつ傾向にある母親は子どもを虐待している割合が高いことも報告されている(望月ら,2014)。産後うつ病の発症率は

2001年では13.4%、2014年では9.0%と減少傾向にはあるが、今後も妊娠以前から育児期に至るまでの継続的な予防的介入の必要性が提言されている(厚生労働省,2015)。このように、産後の母親の抑うつは重要であると考えられる。

産後は妊娠を維持するために胎盤から分泌

されていた高濃度のホルモンが、分娩時に胎盤娩出に伴って短期間に消退していく。この急激なホルモンバランスの変動に心身の変動の適応が追いつかないことが産後の気分障害の要因となる(佐々木,2015)。産後早期の母親としての自信の喪失(安藤,2009)、産褥早期の育児困難感がうつ症状を強めると報告されている(藤岡ら,2014)。藤野(2012)は、育児効力感の低下が母親としての自信の低下に繋がると報告している。母親としての自信が産後の抑うつに影響していることから、産褥早期に母親の育児困難感を減らし、育児効力感を上げることが重要であると考えられる。

母親の抑うつの要因として育児の中でも、特に授乳トラブルが多いことが複数の先行研究(佐藤ら,2003;梅崎ら,2015)で明らかにされている。また、完全母乳育児を行っている母親はより児を肯定的に受容できることが明らかにされている(武本ら,2011)。これらのことから、育児技術の中でも特に母乳育児は産後の母親としての自信に重要な影響を与えると考えられる。

出産による身体的な疲労が残る中で始まる母乳育児は、母乳不足感や乳頭トラブルなどを伴い(古川ら,2013)、母親にとって想像以上の困難となっていると考えられる。また、妊娠中の母親は母乳育児を行うことが母親として当然で自然な能力であると考え、できない場合は「すごい悔しい」という感情を味わうことになる(濱田,2012)。実際に、産後の母親の育児不安に占める「授乳に関すること」の割合は高く、「母乳不足の心配」に限ってみても、産後1ヶ月の母親の約半数が不安を感じていたと報告している(島田ら,2001;梅崎ら,2015)。

このように完全母乳育児ができないことへの意識や授乳方法、授乳に関するトラブルが育児不安に関連していることから母乳育児に関することと母親の自信との関連をみることに重要であると考えられる。

これらから本研究において、産後早期の母親の母親としての自信と母乳育児の関連につ

いて明らかにし、母親としての自信を強める育児支援について検討することは産後の母子の支援者の支援の一助となると考えられる。

## II. 目的

産後早期の母親としての自信と母乳育児との関連について明らかにし、母親としての自信を強める支援について検討する。

## III. 用語の定義

本研究では研究者が以下に用語を定義する。

1. 母親としての自信：母親が子どものニーズに応じる能力やスキルを獲得し、母親としての自己に関する評価を肯定的に捉えられること(Mercer,1995)。
2. 産後早期：産後1ヶ月間。
3. 母乳育児：完全母乳育児のみだけでなくさまざまな栄養方法で育児している母親が経験した母乳育児に関連する技術や意識を含む(授乳方法や授乳時のトラブル、母乳育児への意識)

## IV. 方法

### 1. 対象と研究方法

#### 1) 研究対象

A病院またはBクリニックに1ヶ月健診に訪れた母親

#### 2) 研究期間

平成28年4月～12月末

#### 3) データ回収方法

A病院またはBクリニック1ヶ月健診に訪れた母親に無記名自記式アンケートを直接配布し、郵送法にて回収した。配布時には本研究の目的、倫理的配慮を説明した依頼文を明示し、アンケート用紙の返送をもって研究への同意が得られたものとした。

### 2. 調査内容

1) 基本的属性(年齢、初経産の別、里帰りの有無、平均在胎週数、平均出生体重等)、産科的属性(退院時・退院時・産後1ヶ月時の栄養方法、

## 2) 尺度

### (1) 母性意識尺度 (大日向,1988)

母性意識尺度は母親役割の受容について、積極的で肯定的な意識 6 項目(以下 MP 項目)と消極的で否定的な意識 6 項目(以下 MN 項目)の計 12 項目で構成される。MP 項目は得点が高いほど母親役割の受容が積極的で肯定的であり、MN 項目は得点が高いほど母親役割の受容が消極的・否定的であることを意味する。

### (2) 日本語版母乳育児の自己効力感 (Otsuka et al.2008)

母親が認識する母乳育児に対する自信を測定する。Dennis が開発した母乳育児自己効力感を Otsuka et al. (2008)が日本語版にし、妥当性と信頼性を確かめた 14 項目の質問で構成される。合計得点が高いほうが母乳育児の自己効力感が高いことを意味する。

### (3) 研究者作成の調査項目(参考文献)

母親の自信の程度と母親が経験した母乳育児に関連する技術や意識との関連や育児不安について調査の目的で以下の項目を作成した。

#### ①母親としての自信の程度

母親の自信の程度について、「ある」「ない」の 2 件法から回答を求めた。

#### ②育児で自信がなかったこと(森本ら,2015)

#### ③母乳育児で大変だったこと(永森ら,2010)

#### ④産後こどものことで心配なこと(中垣ら,2012;島田ら,2001)

#### ⑤授乳に関してわからないこと

## 3. 分析方法

1 ヶ月後の母親としての自信と母乳育児の関連について検討するため、1 ヶ月後の「母親としての自信」と「育児で自信がなかったこと」、「母乳育児で大変だったこと」、「産後こどものことで心配だったこと」との関連や各尺度間の関連について初経別に分析した。統計的解析には、統計解析ソフト“IBM SPSSver.22.0 for windows”を使用した。統

計的解析において、カテゴリ間に関連性については $\chi^2$ 検定、相関については Pearson の積率相関係数を算出し、順位尺度に関しては Spearman の順位相関係数を求め、有意水準 5%未満とした。

## 4. 倫理的配慮

本研究は奈良県立医科大学「医の倫理委員会」に審査を申請し、承認を得て実施した(承認番号: 1224)。

### 1) 研究対象施設への倫理的配慮

研究対象施設には、本研究は奈良県立医科大学医学部医の倫理委員会に審査を申請し、承認を得たこと、研究の意義および対象者への倫理的配慮について説明し、文章を同封することで研究への同意を得た。

### 3) 研究対象者に同意を得る方法

研究参加への依頼は、研究対象者に口頭で研究の趣旨を説明し、研究協力の同意を得、質問紙の配布の許可を得て配布した。質問紙は無記名であり個人が特定できないこと、無回答の場合でも不利益は生じないことを説明し、その旨を記載した文書を手渡した。

## V. 結果

### 1. 質問紙の回収結果

質問紙の配布は A 病院 105 部、B クリニック 355 部の計 460 部であった。質問紙の回収率は 50.7%(233/460)で、有効回答率は 92.3%(215/233)であり、215 部を分析の対象とした。

### 2. 対象者の背景(表 1)

母親の平均年齢は、32.1(±4.0)歳、平均在胎週数は 39.0(±1.2)週、平均出生体重は 3092.5(±370.0)g であった。母性意識尺度の平均点は MP 項目が 3.2(±0.5)点、MN 項目が 1.9(±0.5)点、母乳育児自己効力感尺度の平均点は 47.2(±12.4)点、であった。

表 1 対象者の背景

	属性	初産婦		経産婦		p 値
		n	%	n	%	
家族構成	核家族	10	90.3	92	9.0	.995
出産前教室	受講あり	10	92.0	40	39.2	.000
	受講なし	9	8.0	62	60.8	
出産方法	経膈分娩	87	77.0	80	78.4	.966
	帝王切開	26	23.0	22	21.6	
里帰りの有無	あり	86	76.1	48	47.1	.000
	なし	27	23.9	54	52.9	
母親としての自信	あり(退院時)	53	46.9	81	79.4	.000
	あり(1ヶ月後)	74	65.5	86	84.3	
退院時の栄養法	母乳のみ	27	23.9	364	35.3	.065
	混合栄養, ミルク	86	76.1	66	64.7	
1ヶ月後の栄養法	母乳のみ	56	49.6	39	38.2	.197
	混合栄養, ミルク	57	50.4	63	61.8	

$\chi^2$ 検定

3. 初経別にみた各時期の母親としての自信  
退院時・1ヶ月後において母親としての自信を持っていた母親は、初産婦より経産婦のほうが有意に多かった(表1)。

初経別にみた各時期の母親としての自信は、初産婦・経産婦ともに退院時の自信と1ヶ月後の自信の間に正の相関がみられた(表2)。

表 2 初経別の各時期の母親としての自信

	1ヶ月後の自信
退院時の自信	
初産婦(n=113)	.386***
経産婦(n=102)	.564***

Spearman の相関分析 \*\*\*p<.001

4. 初経別にみた母乳育児自己効力感尺度と母性意識尺度の関連(表3)

初産婦、経産婦ともに母乳育児自己効力感尺度と母性意識尺度のMP項目得点の間で有意な正の相関(rs=.420, rs=.259)がみられ、初産婦では、MN項目得点との間に有意な負の相関(rs=-.289)がみられた。

5. 初経別にみた1ヶ月後の母親としての自

信との関連項目

1) 退院時自信がなかった育児技術(表4)

初産婦の退院時自信がなかった育児技術「うまく授乳できないときの対応」、「授乳時の抱き方・吸わせ方」と1ヶ月後の母親としての自信の間に有意な差がみられた(p=.007, p=.027)。経産婦では育児技術では有意な差はなかった。

2) 栄養方法(表5)

初産婦では、1ヶ月後に母乳のみで授乳していることと1ヶ月後の母親としての自信との間に有意な関連があった(p=.015)。経産婦では有意な差はなかった。

3) 母乳育児に関して大変だったこと(表6)

退院時「周囲より授乳がうまくいかない」、「スタッフによって情報が異なる」や、わからないことで大変だったと感じていた初産婦と1ヶ月後の母親としての自信との間に有意な関連がみられたが経産婦では有意な差はなかった。

4) 退院後の子どもの心配ごと(表7)

退院後の「母乳が足りているかどうか」、「ミルクの量がわからない」という初産婦と1ヶ月後の母親としての自信との間に有意な関連がみられたが経産婦では有意な差はなかった。

表3 初経別にみた母乳育児自己効力感尺度と母性意識尺度の関連

	MP 項目	MN 項目
母乳育児自己効力感尺度		
初産婦	.420***	-.289***
経産婦	.259**	-.180

Spearman の相関分析

表4 初経別にみた1ヶ月後の母親としての自信と退院時自信がなかった育児技術との関連

	1ヶ月後の母親としての自信の有無					
	初産婦			経産婦		
退院時	あり	なし	p 値	あり	なし	p 値
育児に自信がなかった育児技術	n=74	n=39		n=86	n=16	
うまく授乳できないときの対応	13	16	.007	12	1	.355 a)
授乳時の抱き方・吸わせ方	19	18	.027	7	2	.189 a)

$\chi^2$ 検定 a)は Fisher の直接法

表5 初経別にみた1ヶ月後の母親としての自信と栄養方法との関連

	1ヶ月後の母親としての自信の有無									
	初産婦					経産婦				
	あり(n=74)		なし(n=39)		p 値	あり(n=86)		なし(n=16)		p 値
n	%	n	%	n		%	n	%		
退院時										
母乳のみ	22	29.7	5	12.8	.057	29	33.7	6	37.5	.794
混合栄養	52	70.3	34	87.2		56	65.1	10	62.5	
1ヶ月後										
母乳のみ	35	48.6	10	25.6	.015	42	48.8	7	43.8	.708
混合栄養	39	52.7	29	74.4		44	51.2	9	56.3	

$\chi^2$ 検定

表6 初経別1ヶ月後の母親としての自信と退院時母乳育児で大変だったこととの関連

	1ヶ月後の母親としての自信の有無					
	初産婦			経産婦		
退院時	あり	なし	p 値	あり	なし	p 値
母乳育児で大変だったこと	n=74	n=39		n=86	n=16	
周囲より授乳がうまくいかない	11	19	.000	7	2	.429 a)
スタッフによって情報が異なる	1	7	.002 a)	7	4	.068 a)
搾乳が必要かわからない	6	9	.026	2	0	.710 a)
児が吸わない理由がわからない	4	7	.038 a)	2	0	.710 a)

$\chi^2$ 検定 a)は Fisher の直接法

表 7 初経別にみた 1 ヶ月後の母親としての自信と退院後子どものことについて心配だったこととの関連

	1 ヶ月後の母親としての自信の有無					
	初産婦			経産婦		
	あり	なし	p 値	あり	なし	p 値
退院後子どものことについて心配だったこと	n=74	n=39		n=86	n=16	
母乳が足りているかどうかわからない	29	23	.045	16	3	.989 <sup>a)</sup>
ミルクの量がわからない	13	14)	.030	11	0	.137 <sup>a)</sup>

$\chi^2$ 検定 a)は Fisher の直接法

## VI. 考察

今回、産後早期の母親の母親としての自信と母乳育児との関連を研究した結果、1 か月後の母親としての自信には、産後早期の母乳育児技術に対する自信や、1 ヶ月後の栄養方法、退院後の母乳の不足に対する不安が関連することが明らかになった。また、母親としての自信を持った母親は初産婦に比べて経産婦のほうが退院時・1 ヶ月後ともに有意に多いことが明らかになった。以下、産後早期の母親の自信に関連する母乳育児に関連した項目について考察する。

### 1. 栄養方法と母親としての自信

1 ヶ月後に母乳栄養が確立していた 45 名の初産婦では、1 ヶ月後に母親としての自信が「ある」と答えた母親が有意に多かった(表 5)。このことから、初産婦においては産後 1 ヶ月に母乳栄養が確立していることは母親としての自信を強める一因となっていると考えられる。武本ら(2011)は、母乳育児を行うことで育児不安が軽減され、子どもを肯定的に受容できるようになることを明らかにしている。一方、柏原ら(2011)は、初めて母乳育児を行う母親は、子どもの空腹と満腹という合図を解釈しづらく困難感を抱くことを明らかにしている。初産婦は経産婦よりも育児経験が少なく、母乳育児に伴う困難感が多いことから、母乳育児が確立したことで得られる母親としての自信がより大きいと考えられる。そのた

め、初産婦は、産後早期に母乳栄養が確立していることが母親としての自信として現れたと推察される。

### 2. 母乳育児で大変だったことと母親としての自信

1 ヶ月後の母親としての自信と退院時の母乳育児で大変だったことが関連していたことは、母乳育児が順調な他の母親と比較して自分はいまよくいかないという状況が、母親としての自信の喪失に繋がると推察される。母親は妊娠中に母乳育児は母親にとって「当然」で「自然」な能力であると考えており、できない場合は「すごい悔しい」という感情を予測している(濱田,2012)。母親は「母親ならば当然できるはずの母乳育児をできない自分」と考え、母親としての自信の喪失に繋がると推測される。

1 か月後に母親としての自信がない初産婦は、退院時「うまく授乳できないときの対応」、「授乳時の抱き方・吸わせ方」などの授乳の基本に関する自信がなく(表 4)、「周囲より授乳がうまくいかない」、「スタッフによって情報が異なる」、「搾乳が必要かわからない」、「赤ちゃんが吸わない理由がわからない」ことに母乳育児の困難さを感じていた(表 6)。1 ヶ月健診に訪れた母親に対して入院中に受けた支援について調査を行った研究では、授乳の基本の支援は 90%以上の母親が受けていると認識していた(森本ら,2015)。しかし、本研究

において「搾乳が必要かわからない」、「赤ちゃんが吸わない理由がわからない」(表 6)、「ミルクの量がわからない」(表 7)など、複数の授乳に関してわからないことが1か月後の母親としての自信の喪失と有意な関連があった。このことから、授乳の基本について「指導を受けた」ことで、退院後母親が母乳育児を「できる」とは限らないと考えられる。

これらのことから、産後入院中の指導だけでは母親としての自信を強めるための支援としては十分ではないが、母乳育児支援は母親としての自信を強めるために必要な支援であることが示唆された。そこで、初産婦では育児相談に関するニーズが高い(島田ら,2006)ことや、訪問指導に対する母親の評価は高く、育児不安軽減につながっている(佐藤ら,2005)ことから、妊娠中や産後入院中に、退院後の相談先や訪問事業に関する情報について母親に具体的に伝えておき、母親が退院後に「いつでも支援が受けられる」という安心感をもてることが重要であると考えられる。また、2週間健診や1ヶ月健診において、母乳育児状況について医療者と一緒に確認する機会をつくることが重要な支援であると考えられる。

また、永森ら(2010)は、母乳育児をしている母親の混乱や不安を招いた保健医療者の関わりとして「一貫性の乏しい情報提供」というカテゴリーを示している。スタッフ間で十分に情報を共有し、患者に一貫した情報を提供することは、母親としての自信を強めるための支援としても重要なことであると考えられる。

## 2. 母親役割の受容と母乳育児自己効力感

初産婦、経産婦ともに母性意識尺度のMP項目得点と母乳育児自己効力感尺度との間で有意な正の相関があった(表 3)。このことは、母親役割を肯定的にとらえている母親は母乳に対する自己効力感も高いということが考えられる。初産婦では、母乳育児自己効力感とMN項目得点との間に負の相関があったこと

から母親役割を否定的にとらえることで母乳への意欲をなくすことが予想される。医療職者は、母乳育児に対する意欲をなくさぬよう授乳トラブルや授乳方法への支援をしていくことで母乳育児の自己効力感が高まり、母親役割の意識も高まると考えられる。

これらから、入院中から女性がこどもの「母親である」ことを肯定的に受容できるように支援することが重要であると考えられる。たとえば授乳が周囲よりも順調に進んでいなかったとしても、積極的に授乳しようとしている姿勢など、母親として肯定的な面や積極的な面を見出しほめること(宗像,2009)で母親としての自信を強めることができると考えられる。

## 3. 研究の限界と今後の課題

今回の調査対象はA病院、Bクリニックの1ヶ月健診に訪れた母親でどちらも同一県内であった。地域の偏りがあり、また総合病院と産科専門という施設間の特徴や人数の偏りも考えられる。今後、地域を広げ、さらなる検証が必要である。

また、今回の研究で得られた結果をもとに介入研究を行い、その効果について検討することが今後の課題として考えられる。

## VII. 結論

今回、母親としての自信に影響を与える要因について母乳育児に関連する要因を初経別に検討した結果、以下のことが明らかになった。

1. 初産婦・経産婦ともに母性意識尺度のMP項目得点と母乳育児自己効力感尺度との間で有意な正の相関があったことから、母親の役割の肯定的な受容を高めることは授乳への意欲はにつながる。

2. 初産婦では1か月後に母親としての自信がなかったものは、退院時「うまく授乳できないときの対応」、「授乳時の抱き方・吸わせ方」に自信がなかった。

3. 初産婦では1ヶ月後に母親としての自信がなかったものは、退院時「周囲より授乳がうまくいかない」、「スタッフによって情報が

異なる」ことが大変だと感じていた。

4. 初産婦では1ヶ月後に母親としての自信がなかったものは、退院時「母乳が足りているかどうか」、「ミルクの量がわからない」ことに不安を抱いていた。

5. 退院時・1ヶ月後において母親としての自信を持っていた母親は、初産婦より経産婦のほうが有意に多いことが明らかになった。

#### 謝辞

本研究に際し、研究の趣旨をご理解いただき、御協力くださいました皆様に心より御礼申し上げます。ならびに本研究に際し、ご指導を賜りました濱田薫教授、松田明子教授、女性健康・助産学専攻の先生方に心から感謝いたします。

なお、本研究は、奈良県立医科大学大学院看護学研究科に2016年度提出した修士論文の一部を発表したものである。

#### 引用・参考文献

- 安藤智子(2009):妊娠期から産後1年における母親の抑うつに関する縦断的研究.風間書房.
- 藤野裕子(2012):産後1ヶ月間でうつ傾向を呈した母親の育児体験の質的研究.母性衛生,53(2):259 - 266.
- 藤岡奈美,亀崎明子,河本恵理,他(2014):初産婦が産褥早期に育児困難感を抱く要因—出産後から5日間の短期縦断調査より—.母性衛生,54(4):563 - 570.
- 古川隆子,富本和(2013):完全母乳栄養継続を困難にする要因の検討.外来小児科,6(2):170-177.
- 濱田真由美(2012):初妊婦の授乳への意思に影響を与える社会規範.日本助産学会誌,26(1):28-39.
- 柏原英子,森恵美(2011):初めて母乳哺育を行う母親が困難感を抱く新生児の哺乳行動.母性衛生,52(2):270-277.
- 勝川由美,坂梨薫,臼井雅美,他(2010):産褥入院の現状と入院期間短縮化の条件—全国調査の結果から—.助産雑誌,64(4):302-306.
- 厚生労働省:「健やか親子 21」最終評価. www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000.../002.pptx(accessed2016-12-24)
- Mercer,R,T.(1995).Becoming a Mother. Springer Series: Focus on Women.Springer Publishing Company.New York.
- 森本眞寿代,南里美貴,山内翠,他(2015):母親が入院中に受けたと認識する育児支援と産後1か月までの育児不安との関連.母性衛生,56(1):154 - 161.
- 望月由妃子,田中笑子,篠原亮次,他(2014):養育者の育児不安および育児環境と虐待との関連.日本公衆誌,61(6):263-274.
- 宗像恒次(2009):最新行動科学からみた健康と病気.メヂカルフレンド社.
- 永森久美子,土江田奈留美,小林紀子,他(2010):日本助産学会誌,24(1):17-27.
- 中垣明美,千葉朝子(2012):産後3・4ヶ月の母親の母親役割獲得と妊娠中における産後の身体的イメージや産後の生活・育児に対する夫婦間調整との関連性.日本助産学会誌,26(2):211-221.
- 岡野禎治(2001):産褥期における気分障害の神経内分泌的研究の進歩.精神科診断学,12:347-360.
- 大日向雅美(1988):母性の研究.川島書店.
- Otsuka K, Dennis CL, Tatsuoka H, et al.(2008):The Relationship Between Breastfeeding Self-Efficacy and Perceived Insufficient Milk Among Japanese Mothers. Journal of Obstetric, Gynecologic, & Neonatal Nursing, 37:546-555.
- 佐々木悦子.(2015).女性の生理学.吉沢豊予子(編),助産師基礎教育テキスト 2015年版第2巻 女性の健康とケア(pp18-27),日本看護協会出版会.
- 佐藤厚子,北宮千秋,李相潤,他(2005):保健師・

- 助産師による新生児訪問指導事業の評価.  
日本公衆雑誌,52(4):328-337.
- 佐藤文,板垣由紀子,後藤道子,他(2003):産後のうつ状態と母子相互作用についての縦断的研究(その 1)ーマタニティブルーズと産後のうつ状態の頻度と背景要因の検討.母性衛生,44(1):51-56.
- 佐藤文,板垣由紀子,森岡由紀子(2003):産後のうつ状態と母子相互作用についての縦断的研究(その 2)ー産後のうつ状態が母子相互作用に及ぼす影響についてー.母性衛生,44(2):221-230.
- 島田三恵子,渡部尚子,神谷整子(2001):産後 1 ヶ月間の母子の心配事と子育て支援のニーズに関する全国調査 - 初経産別,職業の有無による検討 - .小児保健研究,60(5):671 - 679.
- 島田三恵子,杉本充宏,縣俊彦,他(2006):産後 1 ヶ月の母子の心配事と子育て支援のニーズおよび育児環境に関する全国調査 - 「健やか親子 21」5 年後の初経産別,職業の有無による比較検討 - ,小児保健研究,65(6):752-762.
- 武本茂美,中村幸代(2011):児の栄養法別による育児不安および対児感情の関連.日本助産学会誌,25(2):225-232.
- 武田江里子,田村一代(2008):妊産褥婦の気分と対児感情との関連および「怒り - 敵意」に関する要因.日本看護研究学会雑誌,31(1):37-45.
- 田中和子(2007):産後 1 ヶ月の母親に関する育児適応に影響を与える要因の検討.日本助産学会誌,21(2):71-76.
- 梅崎みどり,大井伸子(2015):初産の母親の出産後 1 週間以内と 1 カ月時の抑うつとそれに影響する要因の検討.母性衛生,55(4):677-688.